
異世界モノ語り

朧木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界モノ語り

【Nコード】

N3729N

【作者名】

臈木

【あらすじ】

平凡な日常を生きていた僕の物語は焼かれるような痛みから始まった。

プロローグ

全身を炎に包まれたのならきつとこんな感じなのだろう、そんな激痛が僕を襲った。

理由なんてわからないし知りたくもない、知ろうにも周りは何も見えないし痛み of せいであらゆる感覚がない。立っているのだろうか、座っているのだろうか、横になっっているのか、それとも悶え苦しんでいるのだろうか、ただただ熱い痛み of せいで判断がつかなかった。

生まれてから今日まで、とは言っても痛み of せいで定まらない思考では正確に幾年の年月を生きたかを思い出せないが、成人はしていなかったはずだ。生きてきた中でこんな経験をするのはもちろんなかったし、仮にこの先があるのなら二度とこんな経験を味わいたくない。

たぶん、僕は死んだのだろう。もちろん絶え間なく襲ってくる焼けるような痛み of せいでもともな思考などとうにできなくなっているのだが、生きているうちにこんな痛みを体験したのならば間違いなくショック死しているだろう。だからきつと、僕は死んだ。

だから、急に痛みが消えて胸一杯に埃っぽい空気を吸い込んだ時には生まれ変わった気がしたんだ。

「……………ここはどこだろう？」

瞼を開いた僕の目に最初に移ったのは埃の溜まった石造りの小さ

な寝室だった。

薄暗いその部屋の壁にあけられたガラスのない窓から外の光が差し込み僕を照らす。その温もりが僕が生きているということ鮮明に伝えていた。

そのとき、僕は自分が生まれたままの姿であることに気がついた。あの地獄のような経験から覚めたばかりでいまだに思考のはっきりしない僕だったが、それでも全裸が恥ずかしいという羞恥心は失われていないようですぐに隠すものを探した。

はじめはベッドの毛布を体に巻きつけようと考えたが、残念ながらベッドには毛布どころかクッションすらなく長い年月ほったらかしにされた証の埃が溜まっているだけだった。

仕方なく僕は他の場所を探すことにした。とはいっても本来服のあるべき場所のクローゼットなのだが。

僕がクローゼットの扉を開くと案の定すごい埃が舞い上がった。

しかし目当てのものが見つかり僕はすぐにそれを身につけた。

それは神父が身につけるような黒の法衣だった。

「きつとここは教会なんだ。埃が溜まってたから長い間使われてない、誰もいない教会」

僕はそう結論付け周囲の詮索をすることにした。

寝室を出ると案の定礼拝堂があった。やはり長い間使われていないらしく一面に埃が積もっていた。

僕はそれに足跡を残しながら詮索を続ける。そういえば昔、今の状況に似たような映画を見た気がする。あの映画は教会を出たところで大量のゾンビに追いかけられていた。だから僕は何となくだが外に出るのを後回しにした。

僕は埃っぽい教会の扉という扉を開けていく。お化けが出そうな

地下の扉も開いたが、出てきたのはお化けではなく備蓄された古い食糧だった。色々詮索した結果、生活に必要なものはどれも埃を被っていたが揃っていることがわかった。

「教会の中はどこも調べてしまった」

あとは外しか残されていない。

昔見たホラー映画のせいもあって何となしに外へ出ることを後回しにした僕だったが、やることがなくなってしまった以上外に出るしかない。

僕はしばし迷った後、まず教会の窓から外を確認することにした。教会の窓はどこも手の届かない高い位置にポツカリと穴を開けているだけなので、当然手の届かない僕は折れて転がっていた十字架を梯子の代わりにして窓の外を見た。

そこから見えた光景はさっきまでビクビクしていたのが馬鹿らしくなるほどの静かな町並みだった。

安全を確認した僕は外へと続く大きな扉を押し開け、光の降り注ぐ世界に飛び出した。

「……………うあ」

外に出た僕は目の前の光景に目眩がした。

静かな町並み、静か過ぎる街並み。当然だろう、視界の悪い窓からはわからなかったが、僕の目の前には沢山の死体が転がっていた。生き物なんていなかったのだ。

さらに恐ろしいことに、どの死体も鎧を身に着け剣と盾を持ち死

んでいた。僕の生きていた世界ではそんな時代遅れの装備で戦う人間などいない。

つまり、僕はとんでもない世界へと来てしまったのだった。

「……もしかして盛大なドッキリじゃ？」

その儚い望みも辺りに漂う死体からの生々しい腐臭によって打ち砕かれた。

間違いない、ここは異世界なんだ。

亜人の兵士

亜人とは遙か昔に愛玩用に生み出された他の生物と人間の遺伝子を掛け合わせて作られた者たちの末裔である。

昔の人間たちは狂っているとしか言いようがない。

今も昔も俺たち亜人は獣の因子を保有しているからと言って獣と会話ができたり、群れで狩猟をして暮らしていると勘違いされがちなだがそんな事実はない。昔の人間たちによって姿形を変えられているが、その実人間となんら変わらない精神を持っている。

いや、俺たち亜人の精神は人間に勝っているに違いない。確かに人間と同様に無意味な争いもするが、少なくとも俺たちは姿形が違うからと一族を根絶やしにしようとは思わない。

異形は邪悪という考えを宗教というらしい。

亜人とは欲望の象徴だという。その淫らな姿で高貴なる人をたぶらかす邪悪な存在だと。

笑わせる、造り出したのも慰みモノにしたのもすべてお前たち人間ではないか。その事実を忘却の彼方へと追いやり亜人を淫獣と蔑む。

そして奴らは戦争を始めた。ついに『聖戦』という名の虐殺を始めたのだ。

村は焼かれ、女子供、老いも若きも殺された。

そこまでされて俺たちが黙っているわけもなかった。

.....
.....
.....

戦いに次ぐ戦い、休む間もなく怒りに身を任せ先陣を切って戦った俺の部隊は数多の傷をこしらえて、近くの小さな人間の町に逃げ込んだ。

しかし運の悪いことに、そこには人間の軍隊が待ち構えていたのだ。

俺たちは死に物狂いで戦った。

闘って、戦って、そして勝利した。

人間の軍隊を一人残らず討ち取った時には、俺の後ろで戦っていたはずの仲間たちが一人もいなくなっていた。

そして、気力だけで戦っていた俺もついに倒れた。

もう体はいうことをきかない。きっと俺はここまでだろう。

仲間たちには悪いことをした。逃げ込む先をこの町に決めてしまったばかりに、いや、俺たちはきつとこの町に追い込まれたのだろう。俺にもつと戦の心得があれば仲間を死なせずに済んだのかもしれない。

だが勇士たちよ、お前たちの犠牲は無駄ではなかった。俺たちは最後の最後まで戦い、一部隊の戦力で見事敵軍隊を打ち破って見せた。

お前たちのおかげだ。冥土にて存分に誇るがいい。

「.....生きてますか？ だったら瞬きだけでもいいので反応してください」

その時、俺のすぐそばでそんな声が聞こえた。
俺が瞼を開くとそこに憎々しい黒の法衣を着た少年が立っていた。
神父だった。この戦争を引き起こした宗教を崇拝する悪魔であつた。

俺は未だ剣を握る右手に力を込めるが、ぴくりとも動かない。――
太刀が放てない。

「う、動かないでくださいね」

「……………」

俺は槍を手にした神父の姿を見て敗北を悟った。

俺は敗北した。この神父は俺を突き殺し勝利するだろう。

「よっいしょっ」と

神父が槍を突き刺した。痛みがないのは俺がほとんど死んでいるためだろう。痛みはないが背中に槍が通される感覚があつた。

神父は槍をグリグリと動かす。放つておいても息絶えるこの俺に少しでも苦痛を与えようとしているようだ。しかし残念だったな、俺はすでに痛みを感じないほど弱っているんだ。俺は神父の無駄な行為にわずかに優越感を感じた。

神父は呼吸を乱して槍と格闘する。

「おっりゃあああー！」

そして、神父の気合の一声とともに俺の世界は闇の閉ざされた。

.....
.....
.....

僕は辛うじて生きている兵士をようやく荷車の上に乗せることができた。

兵士が僕の腕力で持ち上げることができない大きさだったので、近くに落ちていた槍を使ってテコの原理を用いて兵士を荷車の上に押し上げたのだ。

少々乱暴だったかもしれないが許してほしいと思う。こんなところで倒れていたらきっと死んでしまう。だから槍の穂先で背中をちよつと抉ってしまったことは許してください。

そんなことを考えながら僕は教会へ向けて荷車を引っ張った。

「.....それにしても、被りモノじゃないよね？」

僕は荷車の上で死んだように眠る兵士を見た。

大柄な男だった。偉丈夫という言葉はこういう男のためにあるのだろうと納得してしまう力強い体だった。

しかし、見過ごせない部分が一か所あった。頭だ、頭が人間のそれとは明らかに異なる異質な雄牛の頭が備わっていたのだ。

「ミノタウロス。いや、ケンタウロスだったかな？」

どちらでもかまわないが主食が人間ではありませんように。

僕は兵士を乗せた荷車を教会へ向けて引く。周りには沢山の死体。

この信じられないような世界を、とりあえず現実と思うことにした僕はまずは生きている人を探した。

話が聞きたい、少しでもこの状況を理解できる情報が欲しい。きっと僕は目の前に転がる無数の『死』に感覚が麻痺していたのだろう。でなければ、こんな何が起こるか分からない場所を無警戒に歩き回ってりしない。

そしてついに見つけたのは頭が牛の大男だ。常人ならまず怯えるであろうその姿に感覚の麻痺した僕は迷うことなく助けようとした。世界が僕にとって異質すぎて常識の線引きができない、それでも死に逝く命を助けなければと思ったのは僕が平和な日本という国で生まれ育ったためだろう。

「ふう、ようやく着いた」

やっとのことで僕が教会に辿り着いた頃にはあんなに高かった太陽が山の向こうに沈んでしまっていた。

月明かりに照らされる教会、僕は幻想的なその光景に魅入ってしまった。

僕がその呪縛から解放されたのは雲が月明かりを遮った時だった。

「……………灯りを点けなきゃ」

ボンヤリとした頭で僕は灯り探しに教会の奥へと向かう。
しかし、気が付くと僕の体は教会の床に倒れていた。

「……………あれ？ おかしいな」

今日一日、酷使された僕の心身はどうしようもなく疲れ果てていた。

そして僕は冷たい教会の床の上で、まるでテレビのスイッチを切るように意識を手放したのだった。

どんなに心の強い人間であろうとも長時間極限状態にさらされれば少なからず精神がおかしくなる。これは過度のストレスによる思考能力の低下などが原因だ。

当然、僕も例外ではない。気が付いたら明らかに地球ではない世界で何も持たずに、何も知らずに、何をしたらいいのかもわからないまま放りだされるなどという、そんな極限状態によって思考力の落ちた僕はただ、毎日のように街に出て、生者を探し死体を埋め、そして未だ目覚めない唯一の生存者　牛男の治療をする。同じ行動を繰り返しているだけだった。

幸い、僕のこの行動に死の危険性が少なく、食料や寝床や衣服が教会で手に入り多少なりとも休める空間があるので、僕が完全に発狂してしまうようなことは無かった。

けれども、戦場だった場所で平然と敵か味方かもわからない（ついでに人間でもない）兵士を治療できるぐらいに僕は狂っていた。

「それともここに慣れてきたのかな？」

だとしたら僕はだいぶんと適応力のある人間だ。と、自分に自分で感心してみる。意味は無いが。

自分が狂っていることに慣れてきているのか、それとも狂った自分が新しい自分として定着して来ているのか、その判断を僕はできなかった。

そもそも、自分が少なからず狂っていることに僕は気付いてすら

いなかった。

.....
.....
.....

高く上った太陽、降り注ぐその光は僕の首筋を焼き、身に付けた黒い法衣は光を吸収し驚くほどの熱を誇っていた。

厭になるほどの熱の中、僕はひと一人いない町で生存者を捜して歩き回る。引つ張るのは人間や、動物と人間が混ざったような、やっぱり人間の死体を乗せた荷車だった。この死体たちは町の中心の干上がった池に埋めるのだ。本当はちゃんとした墓を掘ってやりたかったのだが、それには死体の数が多く、僕は非力すぎた。

だから戦闘で崩れた残骸により池に流れ込む水路がせき止められていたので、そのために干上がってしまった池を墓穴に利用することにしたのだ。

「いったい何十人埋めたんだろう？」

僕は生存者捜しから戻り、荷車に乗せられた死体たちを干上がった池に降ろしながらそんなことを呟いた。

この世界で訳のわからないまま始まった教会での生活、その日から数日が経ち毎日のように死体を埋めてきたがこの作業に終わりがなにかのように思える。

荷車から降ろした死体から剣や指輪、ネックレスといった個人を

特定できそうなものを外して埋める。ここに誰が眠っているのかわかるように。

「……そろそろ土をかけようかな？」

死体を一人ずつ丁寧に埋葬していくと、とてつもなく時間がかかる。死体が数体だったのならそれでよかったのだが、人のいないこの町には軽く三ケタを超える死体が転がっていた。

だから僕は十体前後の死体をまとめて埋めることにしたのだ。

僕は集めた死体を干上がった池の中心にある、今まで死体を埋めることで出来上がった大きな山に並べていく。そしてきれいに並べ終わると、新しい死体たちに丁寧に土を被せ、今日の埋葬を終えた。

この作業を始めたばかりの頃は死体の匂いに何度も嘔吐を繰り返し、もうやめようか、と幾度となく考えた。

けれども僕は未だにこの作業を続けている。死体を放っておくことができなかったし、何より『慣れ』た。死臭で吐き気を催すことももうないし、死体に触れるたびに感じた悪寒ももう感じない。

今では死体の中で食事をするのも平気になった。

「よいつしよっ！」

僕は誰もいない町で見つけたスコップや荷車を片付けると、あつという間に日が沈んでしまい、暗くなった町の中を慣れた足取りで教会に向かった。毎日この作業を繰り返している内にこの町の構造

が頭の中に叩きこまれていた。

そうして僕は根城にしている教会に帰ってきた。

照明は窓から差し込む月明かりのみ、僕によって掃除された教会は埃こそ少なくなつたものの、未だ廃墟という感じがぬぐえない。

そんな中、教会の奥の部屋からまるで魔物が唸るような、そんな音が響いた。

「牛さん！」

僕は慌てて寝室へ向かう。

果たして、そこにいたのは大柄で引き締まつた体の雄牛の頭を備えた男が、小さなベッドの上で傷の痛み悶えていた。

僕が不器用ながらも、治療のために全身に巻きつけた包帯から赤い血がにじんでいる。

「が、がああああ！」

「牛さん大丈夫ですか！ 落ち着いて下さい！」

少年が牛男を教会に運び込んで以来牛男は毎日死んだように眠っていた。

このまま目覚めないかと心配していた僕はわずかに安堵し、そして尋常ではない牛男の悶絶ぶりに慌てて駆け寄った。

「牛さん大丈夫ですか、いえ、見るからに大丈夫そうじゃない様子なんですけどとにかく落ち着きましよう！ 深呼吸をしましよう！ ええと僕に合わせて！ ひっひっふー、ひっひっふー……」

「ぐうぐうぐう、がああ！」

何だか激しく間違えているような気がしなくてもないような、そうじゃないような。とりあえず僕も落ち着いた方がいいようだ。

「すーはーすーはー……よし！ まずはこれ以上暴れたら傷が開きそうだから、押さえつけてでも大人しくさせなきゃ」

僕は深呼吸をして落ち着くと、遥かに大きくて力強い（そして牛頭の）男を見て、これから僕がどれほど無謀な挑戦をしようとしているのか確認した。

そして僕は逃げ腰になりつつも、意を決してゆっくりと牛男に近づいていった。

「があー！」

「ヒィ！ く、挫けそう」

悶える牛男は鬼のように恐ろしく、僕は何度も挫けそうになった。そして挫けそうになりながらも牛男に近づいていった。

じりじり

じりじり

じりじりじりじり……ぴと

恐れながらも近づき、とうとうその腕に触れた。

その瞬間、不思議なことに今まで暴れていた牛男がぴたりと暴れるのをやめたのだ。それどころか痛みで乱れていた呼吸も穏やかなものに変わっていた。

「……………すう」

「あれ？ 眠っちゃった？ 少し話せたらよかったですけど……まあ、落ち着いたんならいいかな？」

それから間もなく僕は牛男の手を握ったまま眠りに落ちた。

焦る必要はない、一度目が覚めたのならもう一度目が覚めるはずだ。だったら、元気になった時たくさん話し相手になってもらおう、そう思いながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3729n/>

異世界モノ語り

2011年1月22日18時37分発行